

猿

那智の山にすむひとがした話である

那智はみかん栽培がさかんで

よく熟れた果実を狙う猿は憎い存在

頭が良くてなかなか罠にはかからないが

腕のいい猟師がある日

「猿がとれたぞ！」と

そのひとの家の戸を叩いたらしい

ドーカガサチャンヌー

わたしはその日ちようど早朝に仕事を終えた

ばかりで

うとうとと眠りかけていた

目を擦りながら戸を開けると息の落ち着かぬ

猟師がいた

どうやら猿の生捕りに成功したらしい

これから捌くのでついてこいとのこと

筋肉の盛り上がった背中をうつろに見つめなが  
ら歩いた  
解体場には捕らえられた猿がいて  
きいきい喚いていた  
隣には大きなバケツいっぱい張られた水  
猟師がわたしに指示することには  
猿の両手を片方ずつ持って  
せーので水に沈めて溺れさせるとのこと  
わたしは猿の手を取り上げた  
猿の手は人間と同じ形をしていた  
細い指先の先端に爪が生えていた  
猿の力がわたしに跳ね返ってきて  
わたしはそれをぐっと抑えて  
猟師と一緒に猿を沈めた  
猿ははじめ水面に顔を出そうと暴れていたが  
しばらくくすると大人しくなり  
わたしをじっと見つめてきた  
見つめたままだんだん目の光がなくなってい  
くのがわかった

指に入った力はもう抜けかけていた  
猿は動かなくなった  
もうここらでいいだろう、と水から引き上げ  
ると  
猿は微動した  
まだ意識があったのかと急いで水に入れ直す  
じゃばん、という水音のちに  
長い沈黙が解体場に覆いかぶさった  
もう一度引き上げたとき  
猿は今度は完全に動かなくなった  
セクワガル  
猿は個体によって匂いが全然違うんだとその  
ひとは言った  
本当に匂いが違うのか、それとも近い種族だ  
から嗅ぎ分けられてしまうのか、  
ほんとうの理由はわからないねとふたりで話  
した